

## 十和田中振テフラと生態系 Towada Chuseri tephra and its impact on ecosystem

十和田中振テフラ (To-Cu) は十和田カルデラの噴火活動によってもたらされ、十和田カルデラの東方を軸に大きな楕円を描くように分布している。このテフラは、大池昭二 (1972) によって、中振浮石として初めて記載され、その後早川 (1983) によってその噴火様式が明らかにされた。早川 (1983) によれば十和田中振テフラは、下位から中振軽石、金ヶ沢軽石、宇樽部火山灰の3部層からなる。また、下部の中振軽石が最も大規模な噴火によってもたらされ、その噴出量は  $6.5 \text{ km}^3$  と計算された。噴火様式は中程度の強さのプリニアン噴火とされ、箱根東京軽石と同程度のものと考えられた。年代は後藤・辻 (2000) による放射性炭素年代から炭素年で約 5050 yr BP と見積もられる。

十和田中振テフラは生態系に大きな影響を及ぼした。八甲田山ではブナ林が降灰と同時に衰退し、コナラ亜属に取って代わられたことが花粉分析によって明らかにされている (辻ほか, 1983)。青森平野南部の大矢沢野田 (1) 遺跡では、このテフラ降灰直後にクリが急増し、円筒式土器をもつ人々の活動が活発化したことが明らかにされている (後藤・辻, 2000)。円筒式土器がこのテフラ降灰の直後に出現することから (星・茅野, 2006)、十和田中振テフラは、円筒土器文化の形成に深くかかわったと考えられる (辻, 2006)。

### 引用文献

- 後藤香奈子・辻 誠一郎, 2000. 青森平野南部, 青森市大矢沢における縄文時代前期以降の植生史. 植生史研究 9: 43-53.  
 早川由紀夫, 1983. 十和田火山中振テフラ層の分布, 粒度組成, 年代. 火山第2集 28: 263-273.  
 星 雅之・茅野嘉雄, 2006. 十和田中振テフラからみた円筒下層 a 式土器成立期の土器様相. 植生史研究特別第2号: 151-180.  
 大池昭二, 1972. 十和田火山東麓における完新世テフラの編年. 第四紀研究 11: 228-235.  
 辻 誠一郎, 2006. 三内丸山遺跡の生態系史研究: 成果と展望. 植生史研究特別第2号: 1-5.  
 辻 誠一郎・宮地直道・吉川昌伸, 1983. 北八甲田山における更新世末期以降の火山灰層序と植生変遷. 第四紀研究 21: 301-313.  
 (辻 誠一郎 Sei-ichiro Tsuji)



図1 大矢沢野田 (1) 遺跡の「縄文の谷」の埋積物。人物の頭の位置に十和田中振テフラが挟在。



図2 図1の露頭における十和田中振テフラ。



図3 八甲田山田代平湿原における泥炭層断面。下部に十和田中振テフラ、上部に十和田 a テフラと白頭山苦小牧テフラが挟在。

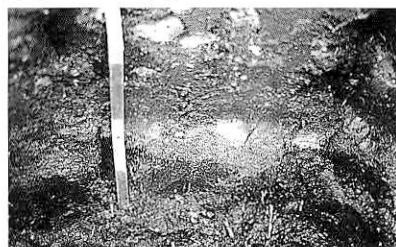


図4 図3の十和田中振テフラ。